

主催者挨拶

近藤 信司

(国立教育政策研究所長)

近藤 信司（国立教育政策研究所長）

本日は全国から多数の皆様方にご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。

この教育研究公開シンポジウムは、国立教育政策研究所の研究成果を、直接教育現場や国民の皆様へ還元し、学校運営や教育内容、教育方法の改善に役立てようという趣旨のもと、平成2年度から開催しています。第27回目となる今回のシンポジウムは、「学士課程教育の構成と体系化」をテーマとして開催することにいたしました。高等教育に関するテーマをこのシンポジウムで取り上げるのは、初の試みでございます。

当研究所は平成20年1月に東京・目黒から霞が関に移転しましたが、本日はこの新しい庁舎で開催する初めてのシンポジウムでもございます。私どもは、新庁舎への移転を契機に、従来にも増して教育政策と密接に連携した調査研究を展開してまいりたいと考えております。

ご承知の通り、我が国の高等教育はすでにユニバーサル段階に入っているとされており、いわゆる「大学全入」時代の到来が予想され、学生の学力や興味・関心も大変多様化してきております。その一方で、経済社会のグローバル化に伴い、国際通用性を備えた質の高い教育を行うことがますます重要になってきております。こうした中で大学教育、とりわけ学士課程教育の改善・充実が極めて重要な課題であろうと認識しております。

中央教育審議会では現在、学士課程教育の在り方に関する審議が行われておりますが、平成20年3月に公表された大学分科会制度・教育部会の審議のまとめでは、社会の信頼に応え、国際通用性を備えた学士課程教育を構築するための様々な方策が提言されております。また、近年の大学教育改革の動きとして、学習成果、ラーニング・アウトカムズを重視しようという国際的な流れがあり、OECD

では現在、高等教育における学習成果の評価に関する国際調査の実施に向けた検討が進められております。そして、そのためのフィージビリティ・スタディには、我が国も参加する意向であり、その場合は当研究所も積極的に関わり、貢献したいと考えております。

当研究所では、平成19年12月に国公私立すべての大学を対象として、「大学における初年次教育に関する調査」を実施するなど、大学教育の改善に関する様々な研究に取り組んでいるところです。本日のシンポジウムでは、その研究成果の報告も行いたいと思っており、講演やパネルディスカッションを通じて、学士課程教育の入口、プロセス、評価、この3つのフェーズから議論を深めていただければと考えております。

本日は当研究所のメンバーに加えまして、文部科学省の久保公人審議官、東京大学の金子元久先生、国際基督教大学の日比谷潤子先生、神戸大学の川嶋太津夫先生にも大変ご多忙の中、ご出席いただきありがとうございます。各先生方には心から御礼を申し上げます。

最後になりましたが、本日のシンポジウムにご出席の皆様にとりまして、実り多い内容となることをお祈りするとともに、各大学における学士課程教育の改善・充実に向けた取組に寄与することを期待しまして、私からのご挨拶とさせていただきます。

